

戦略企画会議から

Progress Report from the Strategic Planning Committee

第五期日本眼科学会戦略企画会議第二委員会の行動計画について

はじめに

第五期日本眼科学会戦略企画会議は2023年1月に開始されました(～2027年12月末日まで)が、第二委員会は「国際化・研究」を担当しています。そのミッションは「日本の眼科学教育・研究を多方面から援助し、国際的なレベルで眼科学研究を発展させ、発信できるように、人材開発および交流の国際化と研究活動の推進を図る」ことです。

ここでは第五期戦略企画会議第二委員会の行動計画と2023年に実施した取り組みの一部を紹介します。

1. 第五期日本眼科学会戦略企画会議第二委員会の構成メンバー

本委員会のメンバーは下記のように、基本的に第四期を引き継ぐ形で、一部だけ変更になっています(敬称略)。

委員長：西田幸二(常務理事，大阪大)
副委員長：中澤 徹(常務理事，東北大)，
石田 晋(理事，北海道大)
委員：相原 一(東京大)，池田康博(宮崎大)，
臼井智彦(国際医療福祉大)，
岡田アナベルあやめ(杏林大)，
坂口裕和(岐阜大)，榛村重人(藤田医大)，
高橋政代(ビジョンケア)，
辻川元一(大阪大)，中村 誠(神戸大)，
西口康二(名古屋大)

2. 第五期日本眼科学会戦略企画会議第二委員会の長期目標

長期目標は、①若手研究者の増加と研究環境整備、②日本発眼科学研究の国際的認知度の向上、および③研究施設・学会を通じた国際交流の推進の3つです。特に、第五期には国際的地位の向上と若手育成に力を入れたいと考えています。すでにご存じの方も多いと思いますが、2023年10月25日発刊のNature誌に、“Japanese research is no longer world class—here’s why”というタイトルの衝撃的な記事が掲載されました。眼科領域も例外ではなく、国際的地位の低下は深刻な問題です。この問題を解決するためには、若手眼科医の自律的な発案と行動が必須であると私は考えています。

3. 第五期日本眼科学会戦略企画会議第二委員会の具体的な行動計画

1) 国際化，研究に関する現状分析(継続)

国際化や研究に関する現状を分析するために、基幹施設ならびに学会員を対象として、アンケート調査を実施しているところです。具体的には、専攻医の学会発表や論文発表、基幹施設での勤務体制(研究時間)と研究環境・財源、国際学会への参加、国際学会メンバーとしての活動、国際論文数の推移、基幹施設での留学生の現状把握(海外へ、国外から、条件)や現状の問題点と留学奨励の手法などの項目です。本アンケート調査は定期的に(数年ごと)行うことにより、日本の眼科の課題抽出などに役立てていきたいと考えています。ご協力いただければ幸いです。

2) 若手眼科臨床医のリサーチマインドの向上(継続)

経験豊富なシニアの先生に、日本の眼科研究に関するインタビューを年1回程度行い、日本眼科学会雑誌に掲載します。若手のリサーチマインドを刺激し、エンカレッジできればと考えています。これまでに2回実施しました(新家 眞先生，木下 茂先生)。

3) 研究教育セミナーの実施(継続，一部新規)

毎年の日本眼科学会総会において、他分野や社会貢献をテーマとしたシンポジウム、基礎研究をテーマとしたスキルトランスファーを企画し、実施します。第四期には眼科研究に関連するシンポジウム、スキルトランスファー、教育セミナーを実施していましたが、このうち教育セミナーについては内容を刷新し、アントレプレナーシップ教育を行うこととしました(「8次世代のイノベーションについての検討」を参照)。また、毎年の日本臨床眼科学会において、Young Ophthalmology committee(YOC)企画のシンポジウムを実施します。

4) 若手研究者の育成と研究環境整備(継続)

若手研究者の育成のために、若手自らの自律的な活動が重要です。後述するYOCの活動を日本眼科学会として継続的に支援していきます。

5) 日本発の眼科研究の国際的認知度の向上(継続)

日本発の眼科研究の国際的認知度の向上のために、Japanese Journal of Ophthalmology(JJO)の地位向上

(インパクトファクターの向上)が重要です。この点につきましては、JJO 編集委員会が継続的に取り組んでいます。

6) 国内外への留学と国外からの研究者留学推進と支援活動(新規)

2023年にYOCが主導となり、若手医師の国内短期研修を行いました。引き続き、YOCの主導の下で、若手医師の国内短期研修を公式な活動として継続していく予定です。

7) 学会の国際化の推進(英語化、国際シンポジウム)(継続)

国際化の推進のためには、学会の国際化、つまり、多くの外国人が参加できる環境整備が重要です。そのため、日本眼科学会総会におけるシンポジウムでは原則英語による発表を提案しています。現在、2025年の日本眼科学会総会での実施に向けて、総集会プログラム委員会とともに検討を行っています。また、2018年に開始しましたJOS International Young Investigator Awardの授与、および同賞受賞者と日本眼科学会学術奨励賞受賞者に講演していただく日本眼科学会総会でのThe International Crosstalk Symposium by Young Ophthalmologistsを継続します。JOS International Young Investigator Awardは、眼科学および視覚科学分野の査読付き学術誌に発表された論文を評価し、アジア太平洋地域の若手眼科医5名に授与する賞です。

日本眼科学会総会で実施している国際シンポジウムとしては、もう一つ、International Symposiumがあります。これまでInternational Symposiumは総集会プログラム委員会、上述のThe International Crosstalk Symposium by Young Ophthalmologistsは戦略企画会議第二委員会で運営企画するということでしたが、2025年の総会からは両者ともに戦略企画会議第二委員会で運営企画することとなりました。International Symposiumの対象分野数を絞ることを予定しています。

8) 次世代のイノベーションについての検討(イノベーション促進委員会の立ち上げ)(新規)

研究成果の実用化のためには、アントレプレナーシップ教育が重要とされています。本会におきましても、イノベーション促進委員会を立ち上げて、アントレプレナーシップ教育について検討を行っています。まずは知的財産や産学連携をテーマとした教育セミナーを

2025年の日本眼科学会総会で実施する予定です。

9) 遺伝子・再生医療の実用化へ向けた支援(新規)

眼科領域における遺伝子・再生医療の研究、実用化を支援するため、日本眼科学会遺伝子・再生医療ワーキンググループを設置しました。本ワーキンググループのもとで、眼科領域の遺伝子・再生医療に関するレジストリおよびガイドラインを眼科関連学会と協力して作成していく体制を整備していきます。

10) 日本の眼科発展のため若手眼科医の提案についての検討(継続)

2023年6月9日に寄稿しました「理事会から」(<https://www.nichigan.or.jp/member/journal/rijikai/detail.html?ItemId=633&dispmid=934>)に記載したように、若手眼科医から多方面の課題に関する提案をしていただくことを目的として、YOCを立ち上げました。国際的人材の育成、国際交流の活性化、若手眼科医のキャリアパス、ダイバーシティの実現、リサーチマインドの醸成、若手同士のネットワーキングの形成などが課題として考えられます。委員は、基本的に40歳未満で、年齢、ジェンダー、専門性、地域性、施設などの点を考慮した10名の眼科医から構成されています。YOCは非常に活発に活動されており、自律的に定期開催されています。当面の予定としては、日本臨床眼科学会でのYOC企画シンポジウムの開催および国内短期研修の企画運営です。

11) その他

下記の事項を継続して実施しています。

- ・日本再生医療学会再生医療等製品レジストリ協議会への議員派遣
- ・眼科ゲノム研究のサポート(眼科ゲノム研究委員会)
- ・日本網膜色素変性レジストリプロジェクトの運営支援
- ・日中韓眼科ジョイントミーティングについての検討

おわりに

以上、第五期日本眼科学会戦略企画会議第二委員会の行動計画を紹介しました。国際化ならびに若手の育成は日本の眼科の未来にとってきわめて重要であり、緊急の課題です。ご指導ご協力を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。